

安全作業の継続を目指して

大船渡営林署 ○森林官 石戸谷 哲也
大槌森林経営センター 基幹作業職員 佐々木 市三

1 はじめに

当署管内国有林は、気仙川、甲子川、大槌川など主要河川上流部の水源地帯に位置し、地勢は全体的に急峻で沿岸部は特に急斜地が多い。

大槌森林経営センターに所属する基幹作業職員は6名であり、大槌森林事務所を主たる所属事務所とし、栗橋・釜石森林事務所の作業も実施している。

こうした厳しい条件下での作業であるが、全員が心を一つにして安全を確保しながら計画的・効率的な事業の実行に努めている。

2 課題をとりあげた背景

平成元年9月19日に発生した、収穫調査実行中の鉋による災害（打極のための根際剥皮の際に、鉋が付近のつるに引っ掛かり、手元が狂って左手に切創を負ったもの）を契機に、以降全職員が一丸となり安全対策に取り組み、平成9年11月23日には連続無災害3,000日を達成した。

そして、新たな目標である3,500日達成を目前にし、（平成10年12月31日時点で3,403日）これまでを振り返り、検証することで、今後も私たちが目指す安全作業を継続していくため、この課題を取り上げたものである。

3 研究の方法及び経過

これから述べるものは、平成元年に発生した災害以来、途中平成4年度の業務研究発表（連続無災害1,000日達成当時）を経て、連続無災害3,000日を達成後なおも継続中の現在に至るまで、特に力をいれて行ってきた取り組みである。

基本を遵守した上、全員で決定した取り組みを全員で実行してきたことが、どのようにして無災害の継続につながったかを検証する。

(1) 安全衛生管理計画の策定と実施

本署安全衛生管理計画を基本に、センター及び現場の職員の意見がなるべく反映されるような計画を策定している。

例をあげると、

ア 安全大会等で行われる講話や講習の内容について、職員の希望を予め先方に伝えることでそれにご協力・ご配慮いただいている。

イ 救急法等についての講習の後、その月或いは翌月に模擬訓練を設定し、その際に再度実践することで熟練を図っている。

ウ 蜂刺され災害防止対策としての事前調査や誘因捕殺は、効果が十分に得られるよう前年度の蜂の発生状況や当年度の気候等を把握するなど、画一的にならないよう実施時期に配慮している。

等の各月毎の実施項目やその実施時期等についてアレンジを加えたものになっている。

(2) 職員のアイデアによる安全対策

ア 安全日誌の様式改正

ヒヤリ・ハットや意見を文章にして記するのは少々苦手であるという意見から、容易に記載できるよう（あてはまる項目に○印で記載する）様式を改正し使用している。

図-1 安全日誌の様式

安 全 日 誌				森林事務所			
年月日	年	月	日	曜日	天候	人員	名
場 所	林班	地拵・植付・下刈・つる切・除伐・除II・保間・間伐・歩道・取調・林道・他					
	小班	作業用具 鉋・鋸・鎌・鍬・その他					
森 林 官 からの 指 示 事 項				点 検 結 果 及 び 指 示 事 項			
				署 所 副 所 長 パトロール			
今日の仕事でヒヤリ・ハットしたこと。 有 無 (該当するものに○印を付ける)							
項 目	原 因					時間	そ の 他
転 倒	すべり・石・伐根・草・伐倒木・バランスくずれ・踏みはずし						
飛来落下	枯枝・切片・伐倒木・落石						
はね返り	ため柴・歩行中・埋もれ枝条・小柴						
切 れ	手のすべり・刃物の動き・転倒・力余り・磁石はずれ・踏みつけ						
手元狂い	他の枝・他のつる・柄尻が体に・バランスくずれ						
突 き	枯枝・体の回転・バランスくずれ						
部 位	頭・眼・耳・鼻・口・首・肩・腕・手・胸・背・腹・腰・尻・腿・膝・足						

従来は安全推進員が記載していたが、様式改正により誰でも容易に記載することが出来るようになり、また、記載されるヒヤリ・ハットの件数も増え、それを分析したデータを日常の作業に活用することが可能になった。

平成5年度から平成9年度までのヒヤリ・ハットについて分析してみると、作業種別では保育間伐に続いて、つる切および収穫調査に従事している際に多く発生しているようである。また、原因別ではすべり等による転倒が圧倒的に多く、月別では4月および6月、曜日別では水曜日、時間別においては11時から12時の間が多く発生している。

このように、発生したヒヤリ・ハットを作業種別、原因別、または時間別等で分析したデータをもとに、互いに注意喚起することで危険予知の充実に一役かっている。

表-1

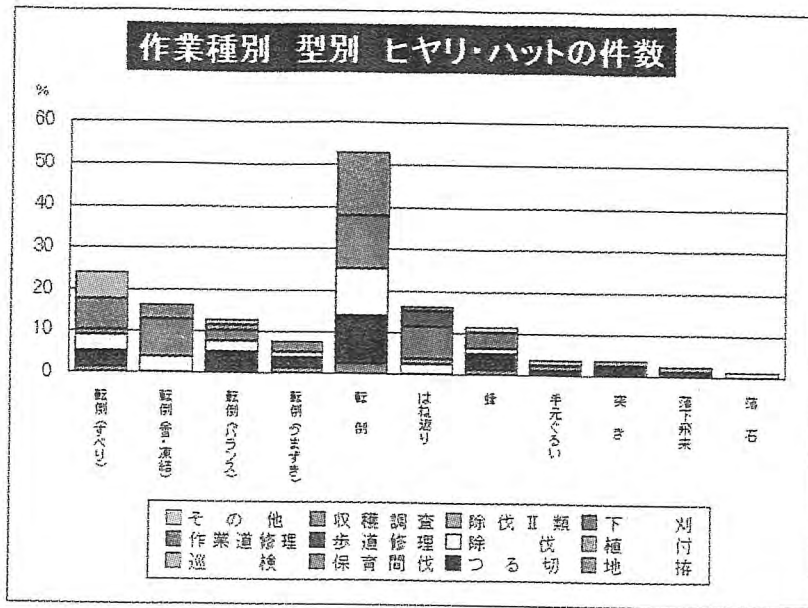


表-2

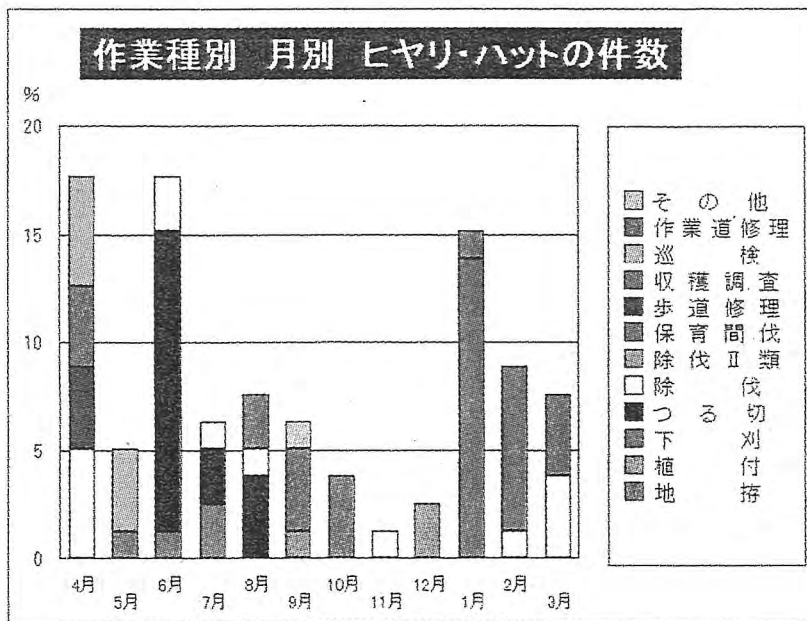


表-3

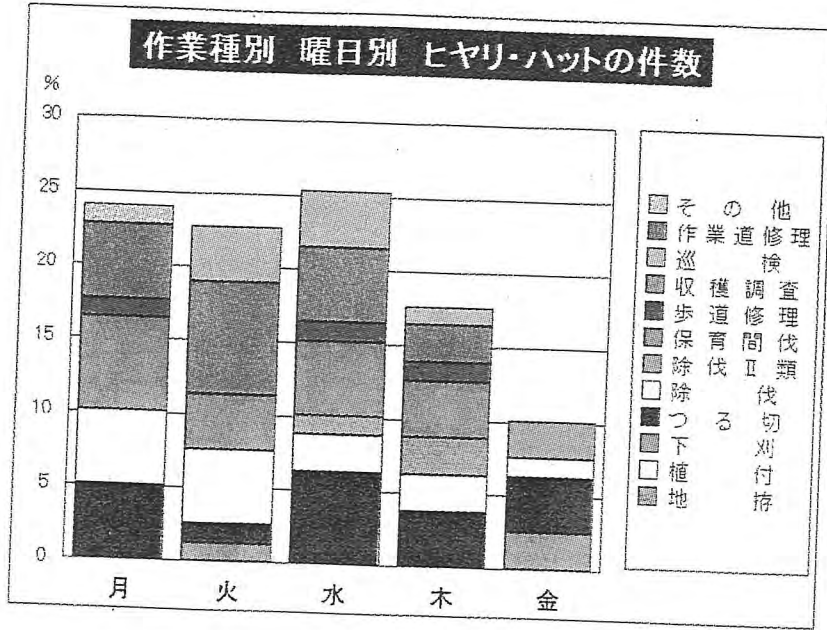
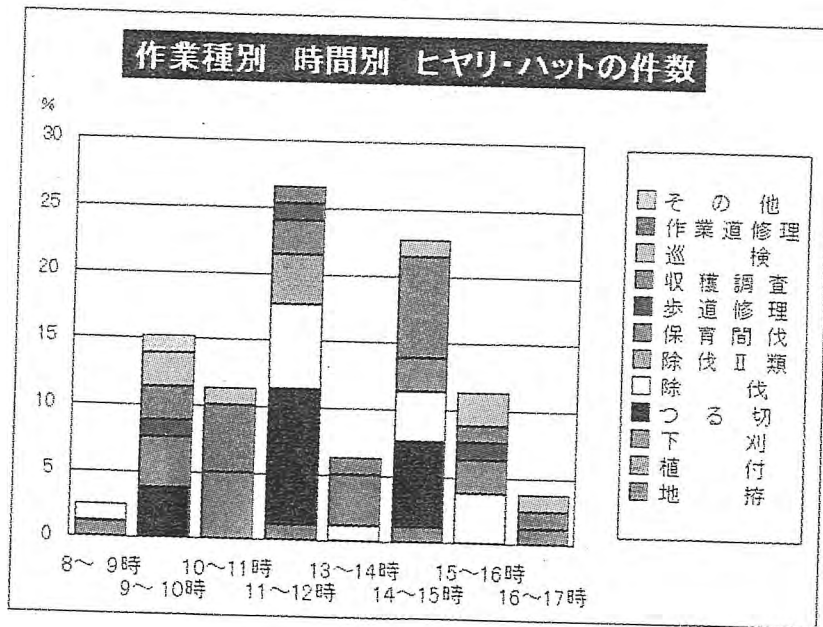


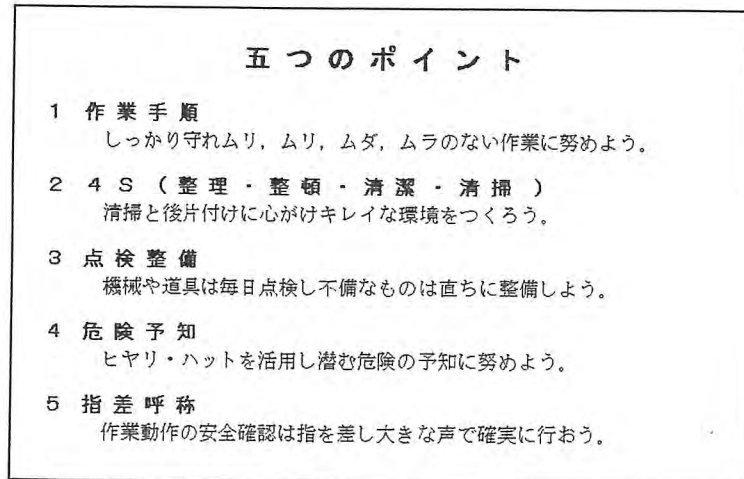
表-4



ウ 油断をまねかないための取り組み

センターにおいて提唱する安全対策のなかに「五つのポイント」というものがあり、①作業手順、②4S（整理・整頓・清潔・清掃）、③点検整備、④危険予知、⑤指差呼称の5点を身に付け災害を未然に防ごうというものであるが、

図-2



このように、安全意識の高揚を図ると同時に、気のゆるみや油断をまねかないようにしようという提案により、人送車や休憩所に掲示し、始業時のミーティングの際に毎日交替で大きな声で読み上げることにしている。

これにより程よい緊張感が得られ、また以前から指摘のあった指差呼称について、声が小さいという問題も解消され徐々に定着してきている。

(3) 安全意識の高揚を図るために

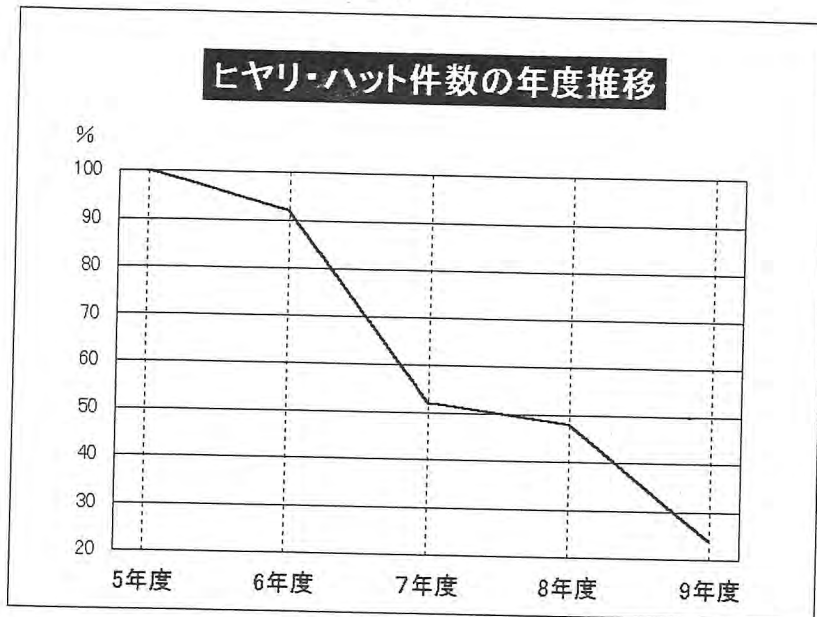
始業時、終業時のミーティングや安全懇談会等の際、ある特定の者の一方的発言だけで終わらせないために、必ず全員が発言・提案するようにしている。

災害発生事例やヒヤリ・ハットの分析等の話題の提供に努め、それらについての全員の意見を集約・検討し、当日の安全目標や安全指針等の作成を行っているが、意見の相違が見られた場合は、納得のいく結論を得るまで話し合い、職場の和の保持に心掛けている。

写-3 安全懇談会の状況



表-5



イ カラースプレーの活用による注意喚起

急峻な地形ゆえに日々の安全目標や安全指針等の作成の際、必ずといっていいほど「足元の確認・注意」という提案がされるものの、ヒヤリ・ハットはバランスをくずしての転倒、すべりによる転倒など、発生件数の半分以上を占めているのが事実である。

そこで、手軽にできる「視覚に訴える安全」に取り組もうという提案により、歩道や日常の歩行中に滑りやすい等の危険を感じた箇所にカラースプレーを使って危険標示し、歩行中の足元への注意を促している。



写-1 落石危険箇所の表示



写-2 足元注意の表示

この取り組みにより、滑りによる転倒等のヒヤリ・ハットが徐々にではあるが減少してきており、効果があったものと考えられる。

写-4 ミーティングの状況



4 研究の結果

計画から実行ならびに反省まで全職員参加を基本とした安全活動を推進していくために、全職員が安全についての理解をより深め、同じ意識を持って臨める体制を確立できたということがいちばんの収穫だった。このことにより、次のような恩恵を受けた。

- (1) 発言等に積極性が増し、忌憚のない助言・注意ができるようになった。
- (2) それを素直に聞き入れ、自分の行動を省みることで基本動作を定着できた。
- (3) チームワークが向上し、職場の一体感が増した。
- (4) 職員の心に、より安全に作業するための創意工夫について日頃から考えるクリエイティブな意識が生まれた。

5 おわりに

しかし、人間はエラーをする生き物であり、不注意や錯覚によるエラー＝ヒヤリ・ハットは必ず発生する。そこには災害につながり得る要因があり、それをゼロにはできなくても、その発生を減らし、また発生しても災害につながらないようにすることは可能である。

そのようにしていくためには、今後努力する余地がまだまだあると考え、これからも積極的な安全活動に取り組んで参ります。